



Let's Green & Clean
一橋植樹会

第7号

<http://www.hitotsubashi-shokujukai.jp/>



- | | |
|----------------|---------------------------|
| I 植樹会から | IV 卒業記念植樹 |
| II 第二次基本計画について | V 国立キャンパスと松
植樹会活動へのお願い |
| III 近時の植樹活動 | VI 大径木・植樹エリア分布図 |

一橋植樹会の活動はホームページで詳しく紹介しております。

I 植樹会から

一橋植樹会会長 津田 正道

一昨年5月に一橋植樹会総会に於いて会長に就任しました昭和42年卒の津田と申します。日頃、一橋大学国立キャンパスの環境整備事業に多大のご支援とご賛助を賜り、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

本冊子は新生植樹会が記念すべき第一回作業を2003年7月に実施した翌年の12月に第一号が編纂されました。その間、時々の活動状況やトピックスのご報告を重ね、今回で第7号を発刊する運びとなりました。

植樹会の歴史は、昭和40年代初めに、増田学長が「国立キャンパスにあるアカマツが害虫により異常に多く枯れていく、これを何とかくい止めたい」と如水会々報で訴えられたところから母校への植樹運動が盛り上がり、昭和48年（1973年）10月に一橋植樹会創立大会が開催されました。今年で創立45周年になります。そして2003年に学生紛争で荒廃したキャンパスを嘆かれた石学長の呼びかけで、労働奉仕を中心とする「新生植樹会」が発足して15周年の記念すべき年に当たります。

その間の事情につきましては、冊子内で八藤南洋前会長（昭和40年卒）が記述されています。また、イチヨウとともに母校のキャンパスを象徴するアカマツの生態と諸問題については関統造顧問（昭和41年卒・森林インストラクター）が詳述されています。更に、新生植樹会発足以来ご指導を頂いている、福嶋司顧問（東京農工大名誉教授）には『一橋大学国立キャンパス緑地基本計画』の概要と実践について寄稿頂いております。

ここでは、上記内容との重複を恐れず、現在、大学と協働して重点項目として取り上げ活動している「要管理木対策」と「アカマツの保全対策」の2点に絞りご案内したいと思います。

要管理木対策

昭和初期に一ツ橋の地から国立に本学が移転した当時の様子については、新生植樹会発足当時貢献された田崎宣義元副学長が、如水会々報平成29年6月号から12月号まで（7月号は除く）5回にわたり詳しく執筆されているので、是非お読みください。

現在の緑豊かなキャンパスの森は、移転当時から大学及び卒業生の努力により植樹が継続されてきた結果です。しかしながら、移転以来90年近くが経過し、キャンパス内には老朽化した危険木や、鳥が運んできた種による武蔵野に相応しくない不要木、或いは、行政から外来危険植物に指定された樹木が多く見られるようになりました。

因みに、明治神宮の森は、人工林ではありますが、人の歩く巡回路と森とはロープで仕切られて、自然林を目指しています。一方、本学キャンパスは当然のことながら研究・勉学に励む学生及び教職員が自由に歩ける場です。その意味では、明らかに危険を排除すべき人工林であり、常時目配りと手入れが必要となります。

昨年6月より、『緑地基本計画レビュー』に従い、大学と協働して東西キャンパスの樹木の調査を実施し、要管理木に優先順位をつけました。植樹会でできることは植樹会で、不要木・危険木で処理不能なものは大学にお願いし、2年程度かけて森の整備・更新を行いたいと考えています。

なお、管理を要する樹木は約130本を数えますが、4年前から植樹会としても累計約130本の新規植樹を実施してきました。除去のみを目的としているのではなく、それ以上の植樹を実施していることを付言いたします。

アカマツの保全対策

松枯れは簡単に申し上げますと、マツノマダラカミキリが媒介するマツノザイゼンチュウが樹木内の導管で水分を遮断することにより起こります。

この問題については、本冊子内で関顧問が触れておられますので、ここでは数字を中心に実態をご説明します。昭和55年の調査では約1,000本存在したアカマツが、翌56年から平成3年までの約10年間で249本が松枯れにより伐採されました。そこで大学は平成4年に755本に対して約22百万円を投じて薬剤の樹幹注入（樹木の活性化）を実施しました。しかしながら平成8年の国立への学部統合による建物増築の影響で更に多くのアカマツが失われました。

5年前には4年間有効の薬剤注入を実施しましたが、本数も限られその間にも松枯れ被害が発生し、現在確認されているアカマツは約360本です。更に、被害が拡散しないように一昨年には大学と植樹会折半で約300万円をかけて99本に薬剤注入を行いました。しかしまだ残りの261本に対して手当てする必要があるため、約730万円の資金が必要となっています。

お願い

現在、植樹会の収入は主に会員の皆様の年会費と如水会からの支援金で成り立っています。ご案内のとおり、大学は独立大学法人化以降、毎年文科省からの交付金が削減されています。

上述の目的を達成するためには多額の資金が必要となります。母校キャンパスの「100年の森」を守るべく、植樹会未加入の皆様には是非とも新規会員として入会頂くように改めてお願い申し上げます。

更に、植樹会へのご寄付は「一橋大学後援会」の中で植樹会は特定事業に指定されておりますので、そちらにお願いいたします。

Ⅱ 第二次基本計画について

— 一橋大学国立キャンパス緑地基本計画レビュー —

東京農工大学名誉教授 福嶋 司



はじめに

一橋大学国立キャンパスの緑は都市の中に存在する貴重な「緑の島」であり、市民の緑としても、生活する者の生活空間としても快適な環境を維持する必要がある。そのためには適切な管理が行われなくてはならない。このような観点から、平成16年に『一橋大学国立キャンパス緑地基本計画』（以下『緑地基本計画』と略）を策定した。以来、それを基に10年以上にわたり管理作業を進めてきた。その後、大学と植樹会は、平成27年にはこの『緑地基本計画』の実施状況をレビューし、第一次計画を踏襲した第二次の「基本計画」（＝『緑地基本計画レビュー』（写真をご覧ください、以下『基本計画レビュー』）と略）を策定した。ここでは、第一次の「緑地管理計画」の内容を再確認し、管理作業実践の成果、レビューを基にした第二次「緑地管理計画」と今後の樹木管理等について考えてみたい。

1. 緑地基本計画の基本方針とゾーニング

1) 緑地管理の基本方針

まず、最初に平成16年に策定された基本計画における「緑地管理計画」について確認しよう。キャンパスの緑の管理は、それぞれの場所で期待する機能が十分に発揮されながら、同時に、全体として調和がとれたものでなくてはならない。また、計画の遂行には継続が必要であり、携わる人が変わっても管理方針を維持することが必要である。このような観点から、『緑地基本計画』では以下の基本方針を決めた。

- ①キャンパス全域をゾーンに分けて「緑地管理シート」を作成し、それに基づき管理を進める。
- ②キャンパスの動植物について調査し、それらの生活に影響を与えない管理に努める。
- ③植樹会、教職員、学生及び大学OB等のボランティア活動を積極的に進める。
- ④伐採及び除草により生じた樹木等はゼロエミッション[廃棄物ゼロ]の考え方を導入する。
- ⑤将来に備えた新たな植栽計画を策定し、キャンパスの環境改善と雰囲気づくりに努める。

これらの方針は第二次の緑地管理計画においても基本理念として踏襲されている。

2) ゾーニングの再確認

キャンパス全域をどのような緑として管理していくかを議論した結果、「移転当初に期待されていた緑の機能」を意識してゾーン分けを行い、それらのゾーンを場所ごとに再区分して管理方針を決めることにした。ここで、もう一度、キャンパスのゾーニングについて、復習しておきたい。

キャンパス全域は6ゾーンに区分されており、各ゾーンは以下のような機能を持っていることから、それに望まれる作業方針を決めている。

- I. 解放を前提としたゾーン…このゾーンは人が最も集まる地域であり、日本庭園である中央庭園を中心に修景効果を大切にすることがある。従って、大きく手は加えず、移転時からの姿を保つために、剪定による樹形維持、草本やツル植物の除去、芝生の管理、補植などを行う。
- II. 花木を主体にした植栽ゾーン…このゾーンにはサクラが多く植栽されている。花を咲かせる植栽木が多いことから、それらが健全に生育できることを目標に、樹木の管理、ツル植物の除去、草刈り取り、補植などを行う。
- III. 武蔵野の面影を維持するゾーン…このゾーンはかつての雑木林がそのまま残された地域であり、武蔵野の「雑木林」の性質を保つ緑の空間として維持する。ここでは雑木林の動植物の保護を優先し、枯死木等の危険木の除去(伐採)、樹木間の競争のコントロール、若木の植栽、下刈り、ツル植物の除去、補植などを行う。
- IV. 現状のまま維持するゾーン…このゾーンは、周囲からの騒音を遮断し、キャンパス内の環境を守ることを目的とする。基本的には野生動植物の生活環境の保護を主眼に、管理は周辺部にとどめ、危険木の管理、ツル植物の除去などを行う。
- V. 新植してバッファ機能を持たせるゾーン…キャンパスの周囲であるが、IV. と同じ機能を持たせるために、今後、樹種の選択しながら、樹林帯を造成する。
- VI. 草地(ススキ草原)ゾーン…キャンパスの多様性を増すために草原を造成するゾーンで、季節感の創生、修景効果の向上を図る。

この6つのゾーン区分は、ゾーンIとゾーンIIは「人間の生活が中心」の空間であり、ゾーンIからII、III、IVへ向かうほど野生の植物や昆虫や鳥などの生き物が主に利用する空間とする考えである。なお、実際の管理作業に対応するために、各ゾーンは作業の効率を考慮して特徴により51地区に区分されている。そして、各地区でカルテを作成し、そのカルテには「現在の緑の特徴と問題点」、「管理目標」、「森林階層の管理方法」の3つを検討・記載し、それを基に管理を実施してきた。

また、『緑地基本計画』では、これに加えてキャンパス内での注目すべき「野鳥分布図」、「注目すべき大径木分布図」、「記念植樹配置図」、「草刈り計画図」新たに植栽する「並木等植栽計画図」も作成した。



ゾーニング図



矢野先生像周囲の整備

2. 緑地基本計画の実践とレビュー

1) 緑地基本計画の実践

『緑地基本計画』策定を受けて、作業は一橋植樹会が主体となり、月1回のペースで管理作業を進めてきた。大きく変化した場所の代表的な例としては、次の2ヶ所がある。

その一つは兼松講堂の西に位置する「矢野二郎先生の銅像」周辺の整備である。造成当初はアカマツとサクラを高木に、銅像の周囲にドウダンツツジが植栽され、入り口からは玉砂利が敷かれ、周囲を取り巻いて外溝が設けられていた。しかし、長い年月の間にクスノキ、タイサンボク、アセビなどの常緑樹が多く植えられ、周辺から侵入・生育したムクノキ、シラカシも生育していた。入り口の玉砂利

の道は消え、外溝は土砂と落ち葉で埋まっていた。常緑樹と侵入木の伐採、外溝の浚渫と道の整備などの作業を進めた結果、明るく落ち着いた建設当時の姿を思わせる空間に生まれ変わった。

もう一ヶ所は図書館、兼松講堂、本館の間に位置する中央庭園(日本庭園)である。昭和17年(1942)に撮影された写真でそこに注目すると、植栽された木は小さく、広い芝生の中に小さなツツジが見える。年月とともにそれらも大きく成長した。しかし、その後、内部に記念樹を含む樹木が植えられ、ツツジの上をつる植物が覆い、下からは低木が伸びる状態になっていた。低木とツル植物の除去してみると、それらに覆われた部分のツツジの枝は枯れて無残な樹形であった。ツツジの剪定と管理を積極的に進めた結果、年を経てツツジからは新たな枝が出て樹形も復活し、草本の管理や芝刈りを継続した結果、現在のような美しく整然とした空間に生まれ変わった。

また、新しく樹木を植栽する計画については、キャンパス南西部の野球場の西側道路沿いに、それまで一部にあった桜並木をつなげる形で桜並木を造成した。さらに、マーキュリータワーの東にはキャンパス開設前に広がっていた武蔵野の雑木林を再現すべく、雑木林の樹木の植栽が行われた。さらに、植樹会学生理事の提案で樹木の少ない場所に卒業記念の記念植樹も行われてきた。

この10年間の多くの参加者による地道な作業の結果、キャンパスの緑は多様性に富みメリハリの効いたものへと確実に変化してきたと思う。しかし、草本を中心とした植物の生育は旺盛である。広いキャンパスでの毎月1回の作業では、理想的な範囲の管理作業を完結するのはなかなかむづかしいのが現状である。

この10年間の多くの参加者による地道な作業の結果、キャンパスの緑は多様性に富みメリハリの効いたものへと確実に変化してきたと思う。しかし、草本を中心とした植物の生育は旺盛である。広いキャンパスでの毎月1回の作業では、理想的な範囲の管理作業を完結するのはなかなかむづかしいのが現状である。

2) 緑地基本計画のレビュー

その後、計画に基づく作業開始から10年を過ぎたことから成果を総括して『緑地基本計画』のレビューをする機運が高まり、次の、いわば第二次の基本計画を策定した。そこで計画した目標、作業についての進捗状況を緑地管理シート(カルテ)でチェックし、それをもとに次の計画を立案するという、いわゆるPDCAサイクルを回すことにした。皆で、第一次の『緑地基本計画』で作成された各地区のカルテを持ち、キャンパス内を歩き、各地区の【管理目標】を確認し、【計画時の状況】と第一次の「緑地管理計画」の実践結果について比較・評価した。

区分された地域ごとの評価結果をみると、例えば、矢野二郎先生の銅像の地域のように、想定していた以上に成果があった場所のような評価ランクSが6ヶ所あった。計画通りに実施できた評価Aは37ヶ所、十分な対応ができなかった評価B(やや不十分)は6ヶ所、全く手がつかずに経緯した評価C(不十分)は3ヶ所など進捗状況には対応の違いがあった。しかし、すべてのカルテでの判定結果では、「計画以上」、「計画通り」を合わせると全体の83%の達成率で、確実に成果が表れていた。そして、「不十分」と「やや不十分」を合わせた9地区については、今後さらなる対応が必要であることを確認した。

「第二次緑地基本計画」では、基本的な考え方は「第一次緑地基本計画」の理念を踏襲している。それに加えて、チェックした内容を意識して、今後、対応が必要な項目について検討した。具体的には、「緑地管理シート」作成に当たっては、各地区での【管理目標】、【計画時の状況】と【管理計画】は変わることがないのでそのままとし、計画を実践した結果の【管理の進捗状況】とその【進捗度評価】を新たに書き起こし、今後の【管理計画】と【特記事項】、【目標植生模式図】を追加した。各カルテの内容の詳細については『一橋大学国立キャンパス緑地基本計画レビュー』をご参照されたい。

さらに、その『基本計画レビュー』では、樹木健康度の診断の基礎となる「幹周囲200cm以上の大径木」についてもキャンパス内の調査し、新たに植栽する樹木についても検討している。

さらに、その『基本計画レビュー』では、樹木健康度の診断の基礎となる「幹周囲200cm以上の大径木」についてもキャンパス内の調査し、新たに植栽する樹木についても検討している。

3. 今後の樹木管理

「第二次緑地基本計画」の管理作業を実施するカルテの内容とは別に、今後、キャンパス全体の緑という観点から対応していかなければならないことも発生している。その一つは「マツ枯れ」への対応である。近年、キャンパス内のアカマツは急激に本数を減らしている。樹齢110年以上のアカマツが毎年10本以上枯死し、伐採を余儀なくされている。かつては陸上競技場と野球場の境にはアカマツの高木が林立していたが、それもほとんど枯死した。なお、キャンパスのアカマツについては、本冊の中で関統造氏が「国立キャンパスと松」として詳説されている。アカマツはこのキャンパスだけでなく、武蔵野の原風景を特徴づける種であり、大切にしていきたいものである。

建物の周囲に植栽されたサクラ、ケヤキなどの樹木の衰弱も心配である。キャンパス内に最も多いサクラはソメイヨシノであるが、植栽されたサクラの種類は多い。ソメイヨシノは成長が早いために樹齢20-30年で全盛期を迎え、それ以降は



倒木：2016年1月の雪の日

衰退に向かうと言われている。キャンパス内のソメイヨシノの多くは60年生以上の樹齢を經過しており、幹が腐朽した個体も多い。植樹会の寄付講義「緑の科学」の授業の中で、受講生と一緒に東キャンパスのサクラ109本中の64本で健康状態を、衰弱を示す指標となる着葉率、枯れ枝の有無、キノコの発生、幹裂け、胴吹き、ひこばえ、などを指標に診断した。その結果をみると、健全な生育個体はわずか9本で、全体の14%に過ぎなかった。衰弱の状況でみると、着葉率が低下していた個体は37本（全体の53%）、枯れ枝が認められた個体は17本（27%）、キノコ発生・幹裂け・胴吹きなどが認められた個体が64本中39本（61%）であった。これはキャンパスのごく一部分での調査結果ではあるが、キャンパスのサクラは多くの個体で衰弱が始まっていることは間違いない。同じことが、ケヤキ、ヒマラヤシダ、クスノキなどのような大径木にも言える。ケヤキは昨年、東キャンパスの建物の玄関付近で幹が腐朽して危険な木が発見された。多くの人が頻繁に通る場所であったことから緊急伐採した。

この個体も幹の腐朽が進んでいた。また、かつて、本館前にあったヒマラヤシダの太枝が雪の重さで落下したこともあった。ヒマラヤシダと共に雪のない温暖な地域に本拠地を持つ常緑樹のクスノキも耐雪性に乏しい。これらにも注意が必要である。また、キャンパスの周囲に広がる「武蔵野の雑木林」を構成する樹木も100年近く生育していることから傷みが進んできている。これらの多くは、すぐに倒木などによって人に危険が及ぶ可能性があるため、定期的なチェックは欠かせない。過日、大学当局と植樹会のメンバーがキャンパス内を回り、危険木や衰弱木などのチェックを行い、今後の管理の進め方を検討した。対策は、緊急性の高いものから進めることとして、対応はすでに動き始めている。

今後、キャンパスの建物周囲の樹木については、樹種を問わず定期的なチェックと衰弱の進行が進まないための保護対策が必要である。しかし、問題のある樹木を伐採するだけでなく、キャンパスの木々の世代交代を促すことも考えなくてはならない。特に、伐採した場所には新たな植栽を実施することが必要である。植樹会では大学当局と相談しながら、第二次の緑地基本計画に沿った新植の場所と樹種について、卒業生の記念植樹を含めて具体化の検討を進めている。

以上、紹介してきたように、植樹会によるキャンパス内の植生管理活動は基本計画に基づいて、皆で楽しみながら着実に進められている。そして、植樹会提供の講義『緑の科学』では、年を追うごとに自然の学習教材についても内容の精査が進み、受講学生のキャンパスの自然に関する意識も高まってきている。

この植樹会活動も会員数増加が示すように年を追うごとに盛んになっている。この緑地基本計画の遂行は、学内の生活環境の向上に大きく貢献することであり、同時に、一橋大学の環境、緑に関する意思を内外に示すことにもなる。そして、何よりも、キャンパスの緑の管理に携わった人たちが大学に深い思いを持ち、いつまでも大学を愛し続ける「絆」として貢献していることは間違いない。（了）

キャンパスの資源のトピック

管理作業も楽しいものであるが、時にそれとは違う楽しみがあってもよい。植樹会では管理作業はもちろんであるが、キャンパス内の資源を楽しむことも行っている。春はキャンパス内に生育する植物を使った「若葉の天ぷらパーティ」、晩秋にはキャンパス内に生育するヤマノイモ（自然薯）を掘り、「ヤマノイモパーティ」を行ってきた。キャンパス内に生育するクズは他の植物の上を覆い、枯らす厄介者である。管理作業では、この種の駆除に努めている。しかし、昨年末には、キャンパス内の資源という意味では共通するクズから「クズ粉」を採ってみようという話が出て、それを実際に実践した。次に、このことを紹介しよう。マーキュリータワーの東は、かつてこの地域にあった雑木林の復元が行われた地域である。この地区は明るい空間であるため、かつてはクズが一面を覆う荒れた場所であった。そこで作業はクズの刈り取りとクズの根（地下茎）の掘り取りから始めた。この場所には建設残土が多く埋められており、その作業は大変であった。ここでは定期的な草刈りが行われてきたが、依然としてクズは残り、すぐに繁茂を開始したので、平成29年12月の作業で再びクズの根の掘り起こしを行った。それをそのままごみとして擦れるのはもったいない。考えてみれば、古の人々はこの根で「クズ粉」を製造していたのである。そこでクズからクズ粉が取れるのかどうかを試してみようということになった。掘り起こした根を集め写真1のように根を切断した。ちなみに白い丸は百円硬貨である。そして、根を叩いてでんぷんを含む汁をボールの中で洗う。濁った水を何度も取り換える作業を行った結果、精製できたのが写真2である。精製できたでんぷんは根の量に比べると大変少量である。古人は、如何に時間が豊富にあったこととはいえ、この効率の悪い作業に労力もいとわずに「クズ粉の生産」に努力し続けたのであろう。キャンパスには、様々なことが学べる多くの未利用資源があり、それを利用した一幕である。



写真1 クズの根（地下茎）



写真2 精製できたクズ粉

Ⅲ 近時の植樹活動

植樹会 八藤 南洋（昭40経）



シラカシを植えます

平成25年10月20日（土）の植樹会休日作業は土砂降りの中で行なわれました。この日の作業のメインテーマは13本の苗木の植樹でした。朝からの激しい雨にも拘らず山内学長（当時）を含む教職員、OB・OG、学生計153人が参加した大規模な作業となりました。東キャンパス・マーキュリータワーの東側の雑木林でサクラやコナラの大きな枯損木9本を伐採して出来た空際にクヌギ、コナラ、ヤマザクラ、イロハモミジの苗木を植え11本のドウダンツツジの移植を行ないました。これまで実施されてきた記念植樹や寄贈植樹は殆どが単体でしたが、このような複数の木を雑木林の再生を目的に植樹することは初めての試みでありました。又、ゼミのOB会からの寄付金に植樹会の資金を加え寄付者と植樹会ボランティア会員の手で植えることが出来たことは会の歴史の中でも画期的なことでありました。この年は奇しくも一橋植樹会創立後40年目に当たりました。翌年にはこの小型の雑木林にイロハモミジ3本、外部の騒音の遮断の目的でシラカシ2本を植えました。今は武蔵野の雑木林の柔らかい雰囲気を感じさせる景観を呈しています。

神田一ツ橋から国立への移転時、キャンパスにはクヌギ、コナラ、カエデ等を主体としアカマツも散在する雑木林でした。中央部は日本式庭園が配置され、周辺部の雑木林にアカマツ300本が追加で植樹されたとのこと。又、神田一ツ橋キャンパスのシンボルであったイチヨウも加わり多様な樹種を持つ森が形成されていたと言えます。

昭和48年、最初の一橋植樹会（旧植樹会）が発足しました。愛校心に燃える有志が、学園紛争により荒廃したキャンパスを、再生復活させようと“キャンパスに緑と花を”運動が展開されていました。一方ではアカマツの多くが枯れていることに憂慮された増田学長の如水会会報の寄稿記事が、多くの会員の共感を呼び“緑と花”運動と合わせ、一橋植樹会の名の下、組織化され、活動の一步を踏み出しました。会員からの会費と寄付金を基金とし大学を支援、大学はこの基金を国からの予算を加えキャンパスの環境整備や緑の維持に使用しました。国立移転以来、OBから苗木の寄贈も受け記念植樹として沢山の木々が植樹されました。樹種や植樹場所等統一したコンセプトもなく、色々なところに種々雑多に植えられました。加えて枝下し、剪定、伐採等の樹木の手入れが十分でなかったために森の遷移が進んで、移転時とは異なる、秩序のない森となっていたのです。

小平キャンパスの国立への統合移転（平成8年）により国立キャンパスは従来の倍以上の学生数となり建物も増える一方でキャンパスの自然の整備は遅れていました。このような状態を当時の大学幹部とOB有志が憂慮し、新しい活動内容を持つ植樹会に衣替えることに合意しました。大学が平成16年に策定した『国立キャンパス緑地基本計画』に沿って会員自らの手で除草、枝の剪定、雑木の伐採等の作業活動を行い、大学と共に緑の管理・整備を行なうこととなりました。全面的に業者の力をかりてのキャンパスの緑の管理や整備を行なってきたことを転換、より多くの部分を卒業生・学生・教職員のボランティアが自らの手で大学をサポートしつつ整備・植樹作業を大学を推進していくことと大転換を図ったのです。

このキャンパスの緑の世代更新の難しさは、長い年月を経て多くの樹木が高木化・巨木化しており、日照が高木に妨げられ苗木が育たないことにあります。この文の冒頭の「植樹」の後も、同様の考えで雑木林を構成する樹木を植えて来ましたが残念ながらなかなか成功していません。

嘗て大学側が樹木の伐採には保守的であったため衰弱木・枯損木等の処理が進められませんでした。古木を伐るに当たってお祓いをしたとの逸話が残っている程でした。しかしながら学内関係者のご尽力により最近になって学内での理解が進み枯損木その他の不要木の処分が進められる方向になって来ているのはうれしい限りです。対応・処理には相当のお金と時間はかかると思われます。が、そのことで植樹適地が増加する可能性が高くなってくると考えられます。

大学と共にキャンパス内の枯損木や衰弱木を管理・処分すべき木々として数回に亘り調査しました。サクラやマツなどで老齢のために突然倒木するものも出てきま



地道な作業

した。考えてみればキャンパスが国立へ移転して既に85年以上を経ており、当時の若い樹木も今日90歳以上にも達するものもあると容易に推測されます。キャンパスのこれからの百年の計を想う時、現在の高木・巨木の対応を急ぐ必要があります。新しい命を育てて行かなければならない事は自明の理です。複数回の調査の結果を得て大学も（平成25年4月）急遽、大量190本の幼苗を購入し、苗床を作って予想される新たなる植樹に備えました。その時点では時期・樹種について、あるいは緑地計画との整合性等について、保全・管理面のサポート部隊である植樹会との連携が十全でなかった点は残念なことでした。が、ともかくも樹種の太宗はコナラ、クヌギ、マツ、カエデそしてサクラなどの幼苗であり、いずれもかつての雑木林を構成する樹種であり、養生しながら順次植樹を進めて行くことを決めて、既に実行に移しています。

尚、これらの調査を重ねて10年を経た新生植樹会による『緑地基本計画』の見直し作業も実行しました。10年の植樹会活動の成果の集約とも言うべき『緑地基本計画レビュー』*を発行（平成27年）することに繋がりました。これからもこのレビューを基本にして粛々と緑の環境の整備、積極的な植樹を進めて行って欲しいと思います。

（八藤南洋氏は植樹会前会長）

近時の植樹とそのエリアについては9～10ページの図をご覧ください。

*注：植樹会のホームページからもご覧になれます。

Ⅳ 卒業記念植樹

久野真由美（平27社）



植えたサクラを囲んで

去る1月23日、2015年卒業予定の学生による卒業記念植樹を実施させていただきました。ご多忙中にお越しくくださった沼上副学長先生を始め、卒論で忙しい時期に参加していただいた学生の皆さん、多大なご協力をいただいた植樹会のOB、教職員の皆様にご改めて御礼を申し上げます。当日は21名の卒業予定生が集まり、穏やかな天候の下に行うことができました。

「卒業前に大学に何かを残したい」という学生の思いから始まったこの記念植樹は、今年で9回目を迎えました。自分たちが大学で学び過ごした証を「木」という形でキャンパスに残すことは、母校へ感謝の気持ちを表すと同時に、学生生活に終止符を打ってそれぞれの新しい道へのスタートを切る

意思の表明でもあり、非常に大きな意義のあるイベントだと感じております。

近年、学生と大学、さらには学生同士の情緒的な結びつきが希薄化しており、卒業生の同窓会参加率の低下などにつながっています。大学で友人と過ごした時間やかけがえのない思い出が忘れ去られていってしまうのは、とても寂しいことでしょう。このような状況だからこそ、母校を偲ぶきっかけを残すことのできる卒業記念植樹を学生の手で継続していくことで、私たちと大学とのつながりを少しでも強くしていきたいと考えしっかりと次代に引き継いで、今後の卒業記念植樹のさらなる発展に寄与したいと感じております。～中略～

また、毎年作成しているプレートに、今年は「想」という文字を刻ませていただきました。これは、東日本大震災の直後に入学した学生の多くが卒業する年だということもあり、私たち卒業生が決して他人に無関心になることなく、相手を想いやる気持ちを忘れず、豊かな想像力を持って自ら行動していける人物でいられるようにとの願いを込めて決定いたしました。

今回私たちが植えたカンヒザクラは、春が訪れるたびに鮮やかな美しい花を咲かせてくれることでしょう。この木の存在が、卒業生にとって母校の記憶を思い起こさせるものとなり、久しぶりに大学時代の友人に会ってみようかな、キャンパスを訪れてみようかな、といった感慨を覚えさせてくれることを強く願っております。

（HPへの寄稿文から抜粋転載、久野真由美氏は、当時植樹会学生理事）



翌年見事に花を！

V 国立キャンパスと松

植樹会 関 統造 (昭41社)



国立キャンパスを訪れると、武蔵野の面影を残す木立の素晴らしさに心が癒され、無意識に深呼吸をしたくなる。その中でも空に伸びるアカマツのレンガ色が緑の大画面に冴え、その堂々たる威容に見とれてしまう。校歌「一橋の歌」に「武蔵野深き松風に～」と歌われ、また如水会館3階宴会場に「松風の間」と名付けられるなど、一橋と如水会のシンボルの一つになっている。

ところで大先輩たちはキャンパスのアカマツをどう見ておられたであろうか。母校が国立に移転する直前の大正12年秋、新天地に興味を持たれた山口茂（大6本）、村松恒一郎（大8本）両先生が予定地を訪れている。お二人はまだ新駅がないため、国分寺駅で下車し、線路沿いに立川駅に向かって歩き、見当を付けて南側を下りて歩き出した。その時の描写に、「一面松と雑木の林で、その間に草刈りの通る道らしいものが林の奥に消えている。道路と名のつくものは一つもない。ハギ、オミナエシ、ワレモコウなどの秋草が咲き乱れている」とあり、当時の武蔵野の輪郭が浮かび上がってくる。アカマツも相当豊富であったことがうかがえる。

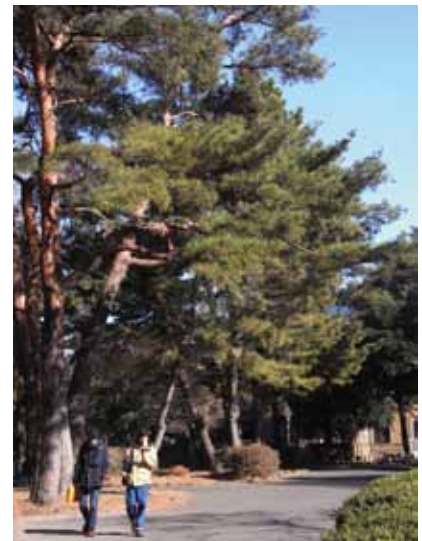
また、増田四郎元学長が昭和40年、キャンパスのマツについて如水会々報2月号に書かれている。先生は農林水産省の専門家にアカマツ林を褒められたが、同時に弱体化していると指摘され、大きな危機感を持たれた。早速限られた予算の中で施肥や老衰木の伐採と新たな植樹を実行されている。マツ一本も国有財産だったので大変苦労されたようだ。「大学が90周年を迎えようとしているとき、構内の赤松にも徹底的な若返り策を施し、更に百年、二百年のちまで、変わらぬ松の緑を保ちたい」とお気持ちを述べられている。植樹会精神の原点とも言えるだろう。実はこの時「松枯れ」の原因はまだ科学的に究明されていなかったのである。

アカマツは武蔵野の里山にあってコナラ、クヌギと共に代表する高木だが、最近では災難続きになっている。アカマツは陽樹であり、コナラ、クヌギ、スダジイなどの広葉樹と共生していると、「遷移」により段々競争に負け衰退してゆく。実生も当然ほとんどなくなる。この現象に関しては、目黒の自然教育園で永年にわたり実験しているので、マツの衰退状況を興味深く観察することができる。

里山が機能していた時代は、薪炭用に広葉樹の伐採が定期的に行われ、アカマツも居場所があったが、現在はその伐採が行われず、アカマツが抑圧されてきている。一方、アカマツは乾燥に強いいため、痩せ地、露岩地帯、山の尾根などに追いやられ生活している。アカマツ保護のためには林や林床の手入れが求められる。手入れは、アカマツと共存し養分を提供する菌根菌（マツタケ）も育成することにもなるが、人手不足で進んでいない。

増田先生が危機感を持たれた「松枯れ」は明治末期から大正にかけて長崎、兵庫県から広がり始めた。枯れたマツから松くい虫が多く発生することから、当初はこれが犯人だと思われた時期もあった。しかしこれら甲虫は健康なマツには産卵出来ず、犯人でないことが判明した。その後もマツを弱らせる犯人は分らぬまま打つ手もなく時が過ぎた。

真犯人が見つかったのは昭和44年のことである。九州の農水省林



西キャンパスで



松枯の様子



陸上競技場横のアカマツも

業試験場でマツノザイセンチュウという1ミリ弱の線虫が発見された。更に昭和46年にマツノマダラキミキリが媒体となって材線虫を運び伝染してゆくことが明らかになった。この材線虫はもともと米国産のマツに寄生していることから、長崎や神戸港に陸揚げされた米松に付いてきたマツノマダラカミキリが拡散し、免疫力のない日本のマツが次々と被害を受けたと推測されている。

一連の集団枯損は昭和55年ごろがピークであった。安芸の宮島（広島県）のマツ枯れはほぼ全島におよび、更に東北地方にも拡散し、松島（宮城県）のマツも大きな被害を受けた。原因は分かっているが有効な防護策がなく、一応予防薬の樹幹注入やマツノマダラカミキリの発生期に薬品散布などが行われている。感染したマツを直ちに伐採隔離し、焼却処分することがもっとも有効な対策となっている。

大学の調査では、この当時、国立キャンパスには約1000本のアカマツが残っていたという。その後、平成8年国立に全学統一されたとき、新たな建物建設による伐採や松枯れの影響で、現在は360本しか残っていない。

増田元学長が心配された状況は残念ながら今でも続いている。今こそ「百年の森プロジェクト」の精神を発揮する時だ。時間と資金が必要な根気のいる継続的事業になるだろう。大学はもとより植樹会も如水会も試されているのではないかと考えている。

（関 統造氏は植樹会顧問）



植樹会活動への支援をお待ちしています。

植樹会の作業に参加してみませんか！
キャンパスの整備・植樹活動は楽しさ一杯です！

植樹会 “入会のお願い”



会員となっていただくには

- 1) 個人会員：卒業生・その家族・一橋大学の教職員
- 2) 団体会員：卒業生で組織しているクラス会、同期生会、ゼミおよび部活動の会、如水会支部団体
- 3) 特別会員：卒業生以外で本会の目的に賛同された方
- 4) 学生会員：一橋大学学部、大学院研究科に在籍の方



●会費（年）

- | | |
|------------------------|--------------------|
| 1) 個人会員：一口 3,000円 | 2) 団体会員：一口 10,000円 |
| 3) 特別会員：10,000円以上、又は免除 | 4) 学生会員：無料 |

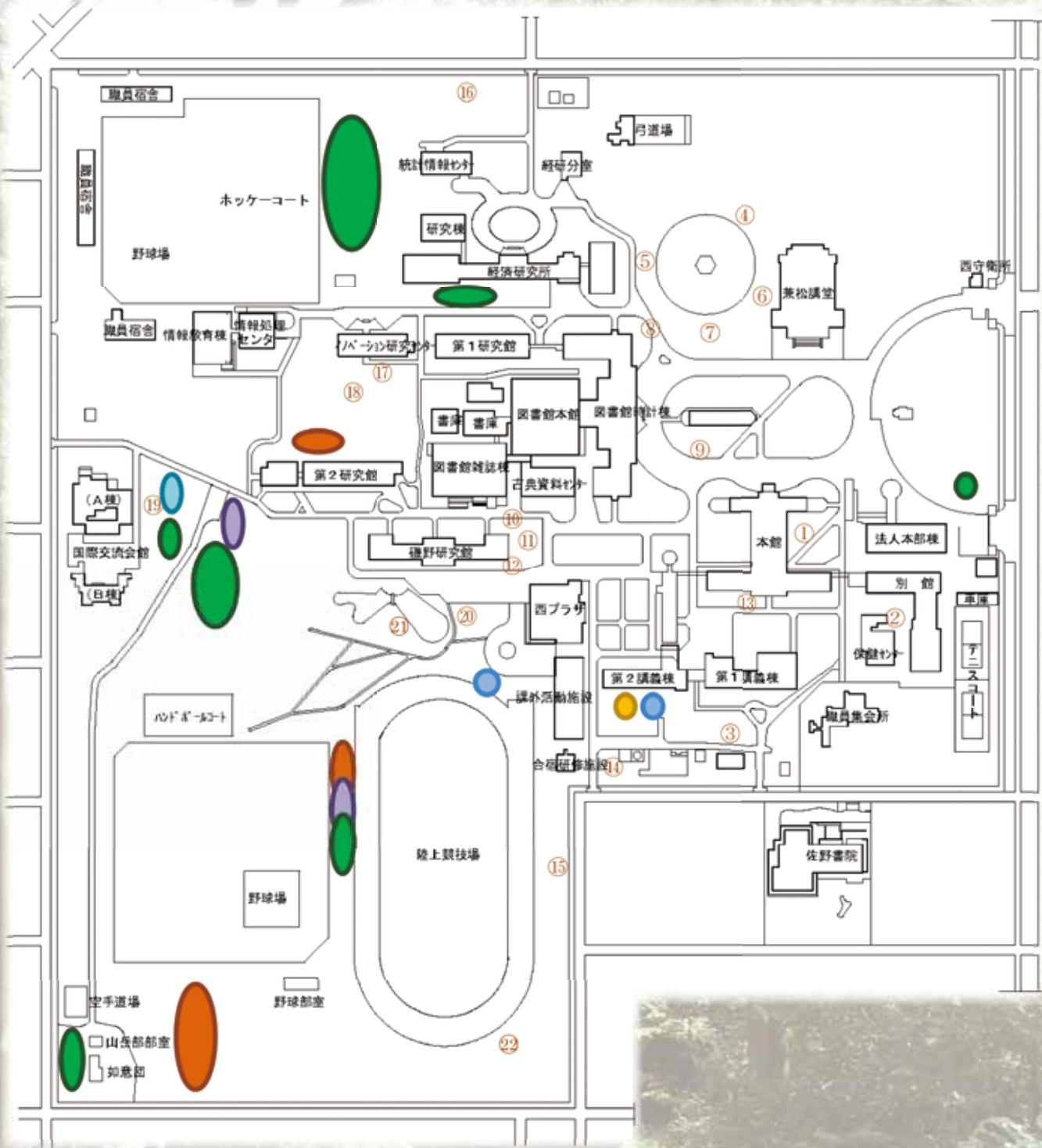
●終身会員制度

- | | |
|-------------------------|--------------------|
| 1) 個人会員：60歳以上 30,000円以上 | 2) 団体会員：100,000円以上 |
| : 40歳～59歳 50,000円以上 | |
| : 40歳未満 70,000円以上 | |

■ ご寄付のお願い ■

植樹会が深く携わっている「キャンパスの保全・植樹活動」にご支援くださいますよう、ご寄付をお願いしております。つきましては直接ご寄付いただくか、あるいは 一橋大学後援会/植樹会基金（大学の『国立キャンパス緑地基本計画』に基づく各種支援事業）（<http://www.hit-u-koenkai.or.jp/>）へのご寄付をお願いしております。これらについても、植樹会のホームページをご覧くださいませ幸いです。

VI 大径木・植樹エリア分布図



大径木(幹回り300cm以上)一覧表



番号	(番号2) *	樹木名	幹回り (cm)
①	東 42	クスノキ	388
②	49	クスノキ	310
③	60	コナラ	302
④	77	エノキ	345
⑤	85	イチョウ	345
⑥	86	イチョウ	320
⑦	88	ケヤキ	324
⑧	89	イチョウ	341
⑨	93	イチョウ	413
⑩	97	ヒマラヤシーダ	333
⑪	101	ヒマラヤシーダ	303
⑫	102	ヒマラヤシーダ	303
⑬	106	クスノキ	375
⑭	110	ソメイヨシノ	442
⑮	114	ソメイヨシノ	328
⑯	118	ケヤキ	395
⑰	140	ケヤキ	455
⑱	145	ケヤキ	435
⑲	168	イチョウ	300
⑳	180	クスノキ	362
㉑	186	スズカケノキ	327
㉒	208	ケヤキ	322
㉓	西 7	イチョウ	300
㉔	15	ヒマラヤシーダ	308
㉕	16	ヒマラヤシーダ	330
㉖	21	メタセコイア	370
㉗	47	イチョウ	351
㉘	52	イチョウ	335

* 『基本計画レビュー』上の掲載番号
同レビューには大径木の詳しい一覧表が掲載されています。植樹会 HP からご覧いただけます。

植樹実績一覧表 (2013/4~2017/12)

(2018年1月現在)

年度	植 樹 実 績 (植 樹 会)			(参考) 卒業記念樹 他	
平成	本数	樹 種	場 所	樹 種	場 所
24年度	1本	ヤマザクラ	西 C (=キャンパス) 岸田ロード	サトザクラ	西 C 講義棟裏
25年度	24本	コナラ、クスギ、ヤマザクラ、ドウダン	東 C 東南隅	サトザクラ	西 C 講義棟裏
26年度	7本	コナラ、イロハモミジ、シラカシ、ヤマザクラ	東 C M (マーキュリー) タワー東	ソヨゴ (3本)*	西 C 陸上競技場脇
				カンヒザクラ	西 C 講義棟裏
27年度	11本	シラカシ、ヤマザクラ、イロハモミジ、アカマツ	東 C M タワー東、西 C 陸上競技場西		
	13本	オカメザクラ、ヨウコウ	西 C 第2研究館北、西 C 西南隅	ギョイコウ	西 C 西南隅
28年度	48本	コナラ、クスギ、イロハモミジ、アカマツ、 クスギ、アバマキ	西 C ホッケー東、西 C 陸上競技場西 西 C 国際交流会館東		
	13本	シラカシ、オオシマザクラ、アンズ	西 C 西南隅、西 C 消防器具置き場		
29年度	12本	マツ、ツゲ、サツキ	西 C 陸上競技場西、東一号館周辺		
	20本	クスギ コナラ	西 C 国際交流会館東		

《註*は植樹会支援植樹》



【お問い合わせ先】

一橋植樹会事務局（如水会事務局内）

TEL : 03-3262-0111



Let's Green & Clean
一橋植樹会

2018年3月